【ポスター発表】

高齢者施設での福祉実践教育プログラムの評価

ー継続的に取り組む学生の振り返りよりー

○　東北福祉大学　　阿部 利江（7795）

高齢者施設、実践活動、教育プログラム評価

１．研 究 目 的

本学では社会福祉現場で体験的な学習を積み重ねる教育プログラムを開講している。そして、実践的且つ理論的に福祉を学べる教育環境や支援体制を整えてきたが、多義にわたる福祉の領域理解や福祉専門職の実践能力を高く求める今日、いま一度、この教育プログラムの見直しが必要だと検討時期に差し掛かっている。

本研究は、この教育プログラムの期待と課題を明らかにして評価することである。

２．研究の視点および方法

１）研究の視点

この教育プログラムは大学初年次から福祉施設で体験的に学ぶ内容を構築してきた。

1年目は「福祉施設の理解と利用者や職員との関係の構築を目指す」、2年目は「施設利用者の生活課題を探り、援助方法を考える」と段階的な学習目標を設定している。これまでに履修した学生の様子から、職業理解や福祉専門職を志す意識の高まりは感じられる一方、福祉施設での体験そのものが「実践力」を高めることにつながると期待しており、教育を担う教員や施設職員の役割は大きい。そのため、学生が福祉施設でどのような学体験をおこなっているのか、1年目と2年目における学びの変容を把握したい。学生の学習成果を整理することで教育プログラム内容の検討につなげていく、これが今回の研究の視点である。

２）研究の方法

高齢者施設での実践活動を振り返るワークショップを開催した［2017 年度：2018 年 1 月 17 日、2018 年度：2019 年 1 月 15 日］。その年(1 年間)にどのような学びが得られたのかを挙げ、付箋紙に記した内容を仲間とともに確認し合い、学びの共有や相互の成長を認め合う場とした。2017 年度は 33 名、2018 年度は 24 名の学生を対象にワークショップを進めた。本研究では 1 年目と 2 年目の学びの変容を整理したく、2018 年度のワークショップには、2017 年度より継続して実践活動に取り組んだ学生のみ参加している。

その後、ワークショップで得られた成果を、報告者らがカテゴリー化して分析を行った。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に則りながら、学生が記した内容により、これからの学

生個人の生活や成績等に影響を及ぼさないことを直接説明した。そして、得られた成果は個人が特定されないよう統計的な処理や分析を行うことで同意を得た。

４．研 究 結 果

1)実践活動１年目に学んだこと（N＝331）

学生は高齢者施設で働く介護職員の姿を目にしている。介護の一部を体験する機会も多く、【施設職員の姿】を挙げて、「介護の業務内容を知った」や「職員の専門職として意識の高さを感じた」、「利用者への接し方がわかった」などと記している。また、【車椅子操作やリネン交換の方法】や【食事の形態や支援の留意点】、【レクリエーションの運営方法】を具体的に挙げてもいた。学生は職員の言動を観察し、実際に職員の指導の下で介護技術の一部を体験できたことは有意義な時間であったようにうかがえる。そして、【認知症の理解】や【命(死)との向き合い方】など、高齢者の人生(生活)の一部にかかわり、ときには辛く悲しい体験をすることもあった。

2)実践活動２年目に学んだこと（N＝206）

学生は施設を利用している高齢者の日々の生活を学びながら、より実践的な活動を望む傾向が高い。その年の最初の段階で利用者の個別支援計画の作成から実施を伝えてくる学生もいる。学生は職員の協力を得て計画するような活動機会も多く、【人間関係の構築】を挙げて、「職員とコミュニケーションをとることが重要だった」や「職員、家族、学生(仲間)とのラポール形成の重要性を感じた」、「意思を汲み取る大切さを知った」などと記していた。また、【レクリエーションの企画】や【アセスメントの方法】、【記録の書き方】を具体的に挙げる内容もあった。施設内での活動(サービス)が細かな計画のもとに展開されていることを知り、課題として挙げる内容が多くうかがえた。そして、【福祉専門職の役割】など、長期的に福祉施設で働く職員や利用者とかかわることで将来のキャリアを考えることにつながっていた。

５．考 察

学生は「社会福祉施設の理解」や「対人援助に求められる知識や技術の習得」などを、この教育プログラムの履修目的に挙げ、大半が福祉専門職を志し、『実践力』を高めたい思いがうかがえる。そして、実際に福祉施設で車椅子の操作やリネン交換、レクリエーション活動の運営など、職員の指導や協力の下で取り組めることに有用感を得ている。しかし、高齢者施設で実践活動を積み重ねていくことは容易でなく、時間の経過とともに学習意欲が損なわれることや取り組みがマンネリ化する傾向も高い。学生が体験一つひとつを、一過性の出来事として捉え、個人の記憶に留めるだけではなく、ソーシャルワークの理論などに基づく学びや幅広く福祉の視点で考える時間を重視する、そのことが教育プログラムの発展につながる。福祉現場(福祉施設)と教育現場(大学)の密な関係が試されていく。